
真面目なんかじゃない

ぱくどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真面目なんかじゃない

【Nコード】

N5036F

【作者名】

ぱくどら

【あらすじ】

『必ずクラブには入部すること』そんな校則のために入部を決めた。しかし、少しずつ上達していく楽しさを知る。上達したいと思うことは、格好悪いことなのか。

入学した高校の規則に『必ずクラブに入部すること』と言うものがあつた。入部しなければ規則違反で最悪の場合退学処分——そういう校則らしい。

俺は元々運動することは嫌いではなかった。しかしだからと言ってクラブに入りたいとは思わなかった。俺自身、馴れ合いやら仲間やら、そういうアツイ関係なんて糞食らえと思っている。中学の時からそういう考えで、中学の時も帰宅部だった。まさか高校でこんな校則があるとは——ため息を漏らしながら、もらったクラブの一覧表を見ていた。

ふと、目に止まったクラブがあつた。

弓道部。

謳い文句にこんなことが書かれている。『初心者歓迎！ みんな未経験者で始めています。礼儀も教わることができるので一石二鳥！ 一緒に始めませんか？』

確かに弓道なんて普段目に触れることはない。何よりもいいのは、入部してくる奴らが未経験者ばかりだと言うことだった。どうせ新しく始めるなら同じスタート地点の方が良い。

そんな単純な理由で入部を決めた。

説明を聞きに、学校の敷地内にある弓道場へと足を運んだ。古ぼけた木材の低い建物。大きく開けられていて、道場内の床は木の板が敷き詰められている。道場の向かいには、原っぱを挟み土が山盛りにされていた。山盛りの土は全長十メートルぐらいの横幅で、そこには白黒交互に描かれた的が五つ置かれている。

案内された俺は、奥の畳のスペースに誘導され、そこから部員たちの様子を見て行った。

どうやら部員は男女合わせて二十人ほどらしい。新入生が見学に

来ると言うこともあるのか、全員が袴を着用している。袴に意外に長い弓と的に当たる矢の音、そして弓を真剣な眼差しで引く先輩たちの様子に、柄になく見とれてしまった。

そこへ弓道部の部長と名乗る女の先輩がやって来た。部長も袴を着ている。

二、三年生がそれぞれ十人ずついるらしい。男女比は女子の方が多い。入ってきてくれたら嬉しい。など、そんなことを丁寧に部長は話している。

そんな話を聞きながら、横や前に座っている同じく新入生に目をやった。

新入生は俺を合わせて六人。男が俺を合わせて四人と女子が二人。俺以外の男三人はどうやらつるんで入ったらしく、あっちもじろじろと俺を眺めていた。女もどうやら友達らしく二人寄り添い、ひそひそとしゃべっていた。

畳の上で説明を受けているのにも関わらず、俺以外の奴らは胡坐をかいたりひそひそと話をしていたりと、全く部長の話に耳を傾けていない。正座をして話を聞いている俺が浮いて見えるぐらいだ。

それでも部長は気弱そうな笑みを浮かべながら、一生懸命弓道部についての話を続けていた。

「まずは、足踏みから教えるからね。見ててね」

次の日からさっそく練習が始まった。

弓が引ける、そう思っただけで挑んだのが失敗だった。やはり何事も基礎かららしい。おまけに準備は下級生が行うもので、先輩たちが来るまでにしないといけない。昨日あんなにいた先輩だったが、ほとんどが幽霊だった。三年の先輩は部長と副部長、マネージャーの三人。俺たちに指導してくれる二年の先輩は、二人しかいない。

あれだけいたのは一体なんだったのか——そんなことを思いながら、教えられた足踏みを黙々とこなした。

「萩野くん。もっと丸く足を横に移動させてね。地味だけど、大事

なことなんだよ」

本当に地味だ。手はなぜか両手とも腰にあて、顔は左に向け、右足の土踏まずを左足の土踏まずにつけ、そして肩幅ぐらいに広げる。そんな動作らしい。

「はい。ありがとうございます」

ありがとうございますと、と先輩に対して言うのも礼儀の一つらしい。ある意味宗教のように思えた。が、それは弓道部の決まりごとらしい。そんなことよりも俺はただ、早く弓を引いてみたいという好奇心しかなかった。

「せんぱーい、こんな動作意味あるんですかぁ？俺、早く弓が引きたいっす」

俺の後ろの男がそう言った。初日から先輩にたてつくとはいい度胸をしている。ちらりと後ろを振り返ると、だるそうに屈んでいたが、そいつだけではなかった。後ろの奴ら全員が足踏みをせず、だるそうに座り込んでいた。足踏みをやっていたのは俺しかいなかったらしい。

「意味あるよ、だからみんなやろう。ね？」

「ええ、かつこ悪いし嫌ですよ。ああ、弓道部って楽って聞いて入部したんだけど……だるいわぁ」

後ろから二人立っていた女たちがそう言った。声がでかく、俺の耳まで届いた。

「ま、形だけでもいいんじゃない？もう帰って買い物でも行こうよ」

「いいね！いいこ」

女二人はそう言う俺の隣にいた先輩の元へと足早にやって来た。「先輩、私たち用事ができたのでお先に失礼しますね。着替えまーす」

返事も待たず道場へ入ると、でかい声で同じように部長に言っている。部長の切れる声が聞こえるかと思いきや、何も聞こえない。隣にいる先輩も呆然と道場内を眺めているだけだった。

「先輩、何も言わないんですか？」

「えっ、ああ……」

俺の言葉に自信がなさそうに俯いた。

「実はね、弓道部って裏でアンパイ部って言われてて……。ほら、校則で絶対にクラブに入らないといけないでしょ？ 実際私たちの学年もそうだし……言えた立場じゃないから余り強く言えないの。」

……萩野くんは真面目でいい子ね」

「俺、真面目でもいい子でもありません」

「謙遜しちゃってえ」

ふふ、と笑うと先輩は後ろへと移動して行った。声の具合から残った男三人をやるように促している。

真面目でいい子。

俺のどこが真面目で、どこがいい子なのか。弓道を極めたいと思っ
て入ったわけではないし、思ったことは言ってしまう性格。それ
のどこを見てそう言っているのか。真面目と不良に分けるとしたら
俺は絶対に不良だと思う。

入部してから数ヶ月。じめじめとした梅雨がもうすぐ終わろうと
していた。それでもまだ弓は握らせてもらっていない。ひたすら弓
を引く動作をしていた。足踏みという動作は射法八節しゃほっちはっせつと呼ばれる動
作の一つらしい。その射法八節の動作をひたすら練習していた。

しかし、少しずつだが弓へと近づいているという実感がある。何
も持たされていなかった手に、小さな木の棒と、矢に見立てた羽根
の付いていないシャフトを手渡された。それを持って足踏みをする
と、なんだかそれらしく思え少し興奮した。

しかし、他の奴らはそうではなかった。

あれから女二人は顔さえ出していない。男三人はクラブには来る
ものの、本当に来るだけだった。準備は一年だけでなくてはいいけ
なくなっていたが、手伝おうとしない。——どうせ手伝われたここ
ろで足しになるとは思わなかったが。

奴らにも俺と同様の道具が渡されたが、それはおもちゃにしかな

らなかった。野球の球とバットに見立て、外で遊んでいる。道場内は狭いので外が一年の練習の場となっていた。

「おい、萩野。なんでお前は、そこまで真面目くんなんだよ」

「マジで真面目くんだよな」

「俺、ソンケイしちゃうわ」

振り返ると、奴らはにやにやと笑っていた。

「別に。真面目じゃねえよ。ただ、やるんなら弓引けるようになりたいだけだ。てめえらも入部したんならやれよ」

そう言い返すと、奴らは腹を抱えて笑い始めた。

「ばあか！　それが真面目だっつーの！　なんでわかんねえの？」

耳障りな笑い声が、堪えていた怒りの扉をねじ開けた。

「わかってねえのはそっちだろうが。やる気がねえならここにくなよ。邪魔なんだよ」

「はあ？　んだとこら！」

相手が先だった。投げてきた木の棒が俺の頭に直撃した。カッとなった俺も、振り返り奴の頬を思いっきり殴り飛ばした。

それからどうなったかよく覚えていない。三人にぼこぼこにされたが、それぞれ頬に一発入れたと記憶している。騒いでいる俺たちに気づいた先輩が割って入ったおかげでその場は収束した。

俺は思ったことが時々言葉として出てしまう。馴れ合いやら仲間なんて糞食らえと思うのはそこにある。言いたいことを言えない関係に何の得がある。俺が三人に言った言葉に間違いはないと思った。三人の後に、俺一人部屋に呼ばれ行った。部長と副部長、マネージャーが眉間に皺を寄せ出迎えた。俺は包み隠さず喧嘩の理由を話した。

「そう。注意したら道具を投げつけられた。萩野くんはそう言うのね」

「はい。間違いないです」

嘘はなかったので、真っ直ぐ部長の顔を見た。が、部長は気まずそうに顔を逸らし、小さくため息を漏らした。副部長とマネージャー

「も顔を見合わせ、気の毒そうに俺を見る。」

「……萩野くん。私たちは萩野くんを信用しているから信じるよ。ただどね、三人は萩野くんが先に殴ったって言っているの」

「は？」

思わず強く言ってしまった。確かに殴ったのは俺が先だ。しかし、あの三人が先に俺に投げてきたせいだった。さらに言うなら、練習をサボって目障りだったことも理由にある。

俺が口を開きそうになったのを感じ取ったのか、先に部長が口を開いた。

「だからね！ 後のことは私たちが片付けるから、萩野くんは何の心配もしなくていいよ」

「でも」

「穏便に済ませましょ？ ややこしいことになったら、みんなぎくしゃくしちゃうから。ね、そうしよう？」

気弱そうな微笑で、部長がそう言った。副部長とマネージャーも俺に同意するように、上目遣いで見てくる。

仕方なく俺は頷いた。

一人騒いでも仕方ない。そう無理矢理納得させた。

それからの先輩たちは、余計に威厳を感じられなくなった。男どもは相変わらずクラブには来るもののマシな練習をしていない。座り込んでしゃべったり、練習を始めたかと思えばすぐにやめる。先輩たちは時々練習するよう促すが、あまり効果はなかった。俺も半ば飽きれ、そのまま放置していた。

もうすぐ夏休みに入ろうかとする、七月下旬だった。突然、先輩たちに道場へ上がるよう指示された。

上がってみれば先輩たちは袴を着ている。何やらいつもと違う雰囲気を感じていると、見たことのない老人が椅子に腰掛けていた。

白髪頭で顔には皺が刻まれ、背は俺よりも低い。袴を着て出ている腕もよぼよぼとし、腕やら手にも皺が刻まれている。しかし、

袴を着慣れているのか風格が感じられた。先輩がその老人の前に並ぶよう指示し、俺たち新入生四人は指示通り並んだ。すると、老人は的を見ていた目線はずし、ゆっくりと振り返った。

「先生。この子たちが今年入ってきた新入部員です。そろそろ弓を引かせたいと思うのですが、ご指導していただけませんか？」

先生。初めて見た。顧問とは違う先生が来ている、という話は聞いていた。滅多に来ないらしく、俺は見たことはなかった。風格が感じられたことに納得していると、先生は皺だらけの顔を崩し、目を細め微笑んだ。

「ほほお、男子四人か。これだと団体戦に出られるな。どれ……さつそくやろうか。あんた……名前は何かね？」

先生の目線が俺に止まった。こんな年配の人とは会話したことがない俺は、一気に緊張した。

「萩野真一です。よ、よろしくお願いします」

「萩野くんか。よし、まずかけをつけて、一番軽い弓を持ってきたなさい。まず巻き藁からだ」

一気に心躍った。ようやく弓が引ける。形だけやっていたものがようやく実を結ぶ。そう思うと自然と顔がにやけてしまった。それを隠すかのように、俺はさっさと準備をした。

先生は手取り足取り指導してくれた。弓の衝撃に恐れが少しあったが、初めて弓を引いたという感動の方が勝った。先生は初めて引く俺を誉めてくれた。

一方で、男三人はひどく怒られていた。基本がなっていない、先輩たちは一体何を指導してきたのか、そんな先生の声が響いた。俺は横目で三人を見ていた。

いい気味だ。

笑いを堪えるのが辛いほどだった。

夏休みに入ると三年の先輩たちは引退した。二年の先輩たちと一年の俺たちのみとなる。しかし、相変わらず二年の先輩たちは顔を

出さず、二人しかない。それからクラブはぐだぐだになっていった。先輩たちは弓を引くものの、俺たちに対し一切指導しなかった。それをいいことに、男三人は余計調子に乗り始めた。飲食は当たり前で、私語の音量も徐々に上がっていく。先輩たちは注意はおるか、一緒になって私語を始めたのだ。

早くに当たたいという次の目標が遠くなっていくような気がした。

夏休みも中頃になった日だった。先生が久しぶりにやって来た。いよいよ的に向かって弓を引く日がやって来たのだ。

「ええじゃあまず……萩野くん。見ていてあげるから引いてみなさい」

先生は顔をほころばせ俺を見た。

俺もやつと的に向かって引ける嬉しさで、にやけてしまいそうだった。——やつと、やつと弓が引ける。練習の成果を試すことができる。

恐々しく、しかし基本を忘れず弓を引く。後ろでは先生が真剣な表情で俺を見ている。後ろの畳では、先輩やら男三人が正座をして見守っていた。

緊張する。黙々と練習をしてきたはずなのに、これでいいのかと自信を失ってしまう。どこを狙えばいい。離すタイミングは。ちゃんと届くのか。

「萩野くん、いいぞ。そのまま力まず引きなさい」

先生の言葉が俺の緊張をほぐしてくれる。そして、弦がかけから離れた。

矢は真っ直ぐ飛び、放物線を描きながら、的へと命中した。

「あ……当たった……当たりました！」

「素晴らしい！ おめでとう」

柄にもなく、声を大にして叫んだ。嬉しかった。今までの練習が報われた気がした。ふと、畳を見れば、一発で当てたのを驚いている先輩の顔や、はしゃぐ俺に対しにやにやと笑う男たちの顔が見え

た。

しかし、そんなことは関係なかった。とにかく嬉しかった。

やがて二年の先輩も引退し、俺たちが上級生となった。後輩の下級生は十人ほど集まった。が、やはりアンパイ部として噂されているのか、すぐに来なくなった。残ったのは三人ほどだった。

男三人はというと、相変わらずクラブには来た。しかし、弓など引かない。あいつらは溜まり場として道場に来ているだけだった。
「おい、てめえらいい加減にしろ」

畳の上で菓子を広げる奴らに我慢できず、詰め寄った。最近では着替えもしない。道場にどこかと上がり、準備をする後輩の邪魔さえした。関わることも馬鹿らしいと思い放置を貫いていた俺だったが、後輩から相談されいよいよ注意することとなった。俺も試合が控えていたし、後輩ももうすぐ審査があつた。大事な時期だったのだ。

「あ？　なんだよ、糞真面目の萩野くん。いや……糞真面目な部長さんか？」

糞真面目な萩野、いつの間にかクラブ内はおろか、学年全体から言われるようになっていく。気にもしていないが、おそらくこいつらが発端だろう。

「邪魔だ。弓道する気がないなら、道場から出てけ」

「んなこと知るわけねえだろ。つーか、なんでてめえから指図されなきゃなんねーんだよ。今まで通り俺らを無視すりゃいいだろ。」

…そうやってきたじゃないっすか、糞真面目くん」

ゲラゲラと笑う。

ゴミをちらかし、食べかすを落とす、でかい声でしゃべる。

「でもよお、それって部長として責任逃れだよなあ？　そうじゃね？」

「あ、そうかもしれないねえな。いや、でも糞真面目な萩野くんならそんなことはしないんじゃないか？　今にきつとお怒りが落ちるかも

よ」

「マジで？ そりゃ恐れ多い……って、んなわけねえ！ ばーか！」
笑い合う三人。道場の隅では後輩たちが固唾を飲んで見守っている。

俺は殴りたくなる衝動を抑えるのがやっとだった。怒りで声が震えそうだった。握り締める拳が震える。

「てめえら……なめんじゃねえぞ」

すると、三人は一斉に立ち上がった。ポケットに手を突っ込み、肩を張り、舌打ちをし俺に近寄る。

「あ？ うっせえよ。ん……何、こいつ震えてんだけど！」

「うわ！ マジだ。糞真面目の萩野くん、怒りで震えてんの？」

「真面目でも怒るんですね。ほら、殴ってみるよ、ほら」

一人が俺に頬を差し出してきた。

「でも、殴ったら俺らもやり返すけど？ 前も殴り合って、先輩たちのおかげで問題にはならなかったけど……今度はどうだろうねえ」
一人がにやりと笑いそう言った。

殴って喧嘩になったら……一体どうなる？ 暴力事件として学校は重く見るのか。そうしたらどうなる。もうすぐ最後の試合が控えている。最悪の場合、出場停止になるのか。俺の頭の中に一気に考えが巡った。

一人の俺は、怒りを抑えるよう勧める。しかしもう一人の俺は、怒りにまかせて殴り飛ばせと言う。

俺は三人を睨みつけながら、思索していた。

「何、殴らねえの？ 糞真面目な上にチキン野郎？ うっわ、きもっ」

「それとも何、責任取るのが嫌なの？」

「ほら、殴ってみるよ！」

今の俺には弓道部部长という肩書きがある。もし、問題を起こせば後輩にも迷惑をかけてしまう。後輩は少ないものの、どれも真剣な姿勢で弓を引いていた。こんなどうしようもない奴らのために、

それを邪魔されることなんてない。

「……弓を引く準備をしる。練習を始める」

俺は三人に背を向け、後輩たちに指示をした。見守っていた後輩たちは驚いていたが、すぐさまかけをつけ始めた。かけをつけるために、畳の上上がる後輩たち。三人を避けるように隅っこでかけをつけている。

「結局無視かよ。つまんねえ男だな」

白けた表情で男が舌打ちをした。そんな表情をされようが関係ない。努めて見ないようにした。今は我慢だ。

「……おい、後輩ども。練習なんかさぼっちゃまえよ。こんなことやっても意味ねえよ」

と、一人の男がそう後輩たちに言った。その言葉に後輩たちの手が止まる。

「先輩の言うことは絶対だろ？ 練習終わり！ 今日解散！」

後輩たちに散れとでも言うように手を振っている。他の男たちも顔を緩ませ、にやにやと笑っていた。一方後輩たちは困っているのか、ちらちらと俺を見ってくる。

「おい、聞こえなかったか？ 練習終わりつつつてんだよ」

「で、でも……部長は……」

一人の後輩が俯き加減に意見をした。その時だった。

三人の男の一人がずかずかとその後輩に近寄ると、蹴りを入れた。痛さにうめき声を上げる後輩。それに構わずなおも蹴りを入れている。

「誰に向かって口答えしてんだよ！ 先輩の言うことは絶対だろうが！ 聞いてんのか？ さつさと帰れつつつてんだよ」

蹴りをやめ、呆然としている後輩たちに睨みつけた。それにびびった後輩たちは途端かけをしまい始めた。すると、もう一人の男がかけを片付けている後輩の元へ行くと屈みこんだ。

「こんなもんいらねえよ。捨てちまえ。な？」

後輩は何も言えず、ただ首を横に振っている。すると、男が拳を

振り上げた。

もう……耐え切れない。

俺は咄嗟にその拳を掴んだ。

「てめえらしい加減にしろ」

頭に血が上りきっていた。顔が一気に熱くなる。俺はその男を睨みつけた。

すると、男たちが三人俺の周りを囲んだ。威嚇するかのようには手をぼきぼきと鳴らしている。

「やっとやる気になった？ 糞真面目の萩野くん」

「うつせえよ、邪魔なんだよてめえら。さっさと出てけ」

俺は握った拳を引きずりそのまま道場の外へ投げようとした。が、男はそれを振りほどいた。その途端、近くにあった俺の練習用の矢を一本手に取った。

それを目の前で持つて見せにやにやと笑い始めた。

「ばっかじゃねえの、お前。何必死になつてんだ、マジ笑えるんだけど。こんなクラブやつてても意味ねえってわかんねえのか。……

こんな矢ゴミだよ、ゴミ！」

そう叫んだ男は、手に力を入れ始めた。

「な、何やってんだ……やめろ！」

男は腕を震わせながら矢を折ろうとしている。そうわかった瞬間に、俺はすぐ止めようと駆け出した。が遅かった。

俺の目の前で矢は真つ二つに折れてしまった。乾いたパキンという音が嫌に道場に響き渡った。その光景が信じられず、一瞬真つ白となった。

無残にも真つ二つになった矢を眺めると、自然と初めての的に当たった時のことが蘇ってきた。

特別な矢。それが壊された。

「すっげえ、お前金属の棒折ったのかよ。マジかよ」

「俺でもできそうじゃね？ もう一本やってやろうか」

男三人はゲラゲラと大声で笑い合っている。

俺はその光景が信じられなかった。なんでこいつらは笑ってんだ。なんで俺の矢が壊されなきゃいけないんだ。俺は間違っていたか？ いや間違っていない。床に転がる折れた矢を見ながら呆然と思った。

そして、一瞬にして怒りへと変わった。

気づいた時にはそいつを殴り倒していた。そして、後ろから襲ってきた奴らにも拳を振り上げていた。

あとはよく覚えていない。後輩が必死に俺を押さえようとしていた。気づくと、奴らの顔は見るも無残に腫れあがっていた。おまけに運が悪いことに、通りがかった学校の先生に見られてしまった。先生は状況を聞くことなく、すぐさま俺を生徒指導室へと連れて行った。

下されたのは、試合出場停止と後輩たちの審査の受験取り消しだった。

最後の試合は出場することもなく終わったのだ。試合がない、ということとは引退を意味していた。最後、今までやってきたことを出し切ることもなく終わった。

俺は悔しくて泣いた。後輩たちにも謝った。情けない。部長としての責任を果たすこともなく、問題を起こし、迷惑をかけた。一方、奴らにはお咎めはなかった。しかし、あの日以来来ることはなかった。

それからの俺はただ呆然と弓を引いていた。本当は、道場へ来るべきじゃないとわかってている。しかし、煮え切らない心の靄は弓を引く以外晴れる手段がなかった。では、何を目標にすればいいかと考えても浮かばない。ただ後悔だけが募る。我慢しきれなかった自分の不甲斐なさと、責任の重さが重く肩に乗っていた。——俺の今までの努力は一体なんだったのか。

「……萩野くん。元気がないな」

そこへ先生がやってきた。先生が来る予定ではなかったなので、慌

てて出迎えた。当然俺は袴ではない。まずそのことを詫びると、先生は笑った。

「なあに気にすることじゃない。今日来るとは言っていなかったしな。……さあ弓を引こう。見てあげよう」

その一言で、すぐさま練習を始めた。後輩たちも慌てて袴に着替え、いつもの時間が流れ始めた。

「……萩野さんの最後の試合、実は楽しみにしていたんだがね」

そう先生が静かに口を開いた。

道場では後輩たちが的に向かって弓を引いている。俺が後ろで指導している時だった。先生は椅子に座り、遠く的看着ている。

「大体の話は顧問の先生から伺ったよ」

俺が問題を起こしてしまったことを先生は聞いていた。そう聞いた途端、恥ずかしくなり目を背けてしまった。きっと軽蔑するだろう。そう思った。しかし、先生は意外なことを言った。

「矢……残念だったね。確か初めての的に当てた矢だろう？ 壊されるというのは悲しいな」

「え？」

矢、と先生は言った。俺を叱ることも罵ることもなく、矢を残念だったと言った。耳を疑ったが、先生の表情は険しかった。

「私でも同じように殴っておったかもしれん。でもな、やはり暴力はいかん。矢で腹が立ったのかもしれん、もしかすると、もっと他の理由があつたのかもしれん。それでもやってはいけないことだった」

静かに俺に説教をする。俺は黙ってそれを聞いていた。他に何を言われるのか、どんなひどい言葉が出てこようと受け止めるつもりだった。しかし、先生の口からそれ以上の叱りの言葉は出てこなかった。代わりに、先生は頬を緩め優しい笑みを浮かべた。

「萩野くんは私の自慢の生徒だ。初めて当てた矢は失ったが、それ以上の矢を生むかもしれん。学校では弓道を引退したかもしれんが、学校ばかりが活動の場ではない。……どうだ、町の弓道場で次の審

査に向けて練習せんか？」

目を細め笑いかけている。

「で、でもいいんでしょうか？ 俺がそばにいたら先生にまで変な噂が立つんじゃない……」

「噂？ はは、何を言っておる。噂されるまでが華だ。関係ない。

見返してやればいい」

「見返す……ですか？」

先生は深く頷いた。そして、椅子から立ち上がると俺の肩に手を置いた。

「そうだ。男はな、時には足掻いてプライドを見せ付けなきゃならん時があるんだ。噂する奴らどもが黙り込むまで足掻けばいい。呆れて物が言えなくなるまで足掻くのもいい。……やられっぱなしというのとは一番良くない。そうだろう？」

その日以来、毎日町の弓道場へ通っている。先生は毎回俺を出迎えてくれる。嫌な顔一つも浮かべず、真剣に指導してくれる。学校は変わらずだったが、別にどうでもよくなっていた。むしろ言うておけばいいと思い始めた。

いつか全員を見返す。

『見返す』

この努力がいつか報われる。いつかきつと何かの差となって現れる。そう思っ、毎日弓道に勤しんでいる。馬鹿にしてきた奴らが、いつか俺を見直すまで、一人黙々と弓を引く。

（後書き）

お読みいただきましてありがとうございました。

一万字を超える作品を読んでいただいたことに感謝致します。ありがとうございます。

実はこの話は、拙作の連載小説の主人公の過去話です。初めて私の作品を読まれる方には関係ないことですが、一応報告のみさせていただきます。

高校の時、真面目に授業を受けたり掃除をしたりしている子が、とてつもなく賢い子として目に映りました。不真面目の方がカッコイイという歪な考えが広まっていました。

この作品は、そんな状況に翻弄され、どちらが正しいのか悩む主人公、という話を執筆してみました。

……うまく描けているのか不安ですが。

よろしければご意見ご感想、または批評などお願い致します。>（

—*）<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5036f/>

真面目なんかじゃない

2010年10月8日15時49分発行